

# 「伝統と個人の才能」と『エゴイスト』誌

島 田 協 子

“Tradition and the Individual Talent” and *The Egoist*

Kyoko SHIMADA

## はじめに

「伝統と個人の才能」(“Tradition and the Individual Talent”, 1919)は、おそらく T.S.エリオットの評論のなかで最もよく知られたものの一つであろう。彼が文壇に登場してから比較的早い時期に書かれたこの評論は、「伝統」や「個性」という言葉をめぐる数々の逆説的定義や、詩人を触媒に喩える化学実験の比喩を含み、また、のちにエリオット自身が自らを「古典主義者」とであると宣言したこととも相俟って、若き日の彼の芸術的立場を表明した一文として、絶えず言及されてきた。この評論の眼目としては、次の二つのことが挙げられるだろう。第一に、ホメロス以来、現在に至るまでに書かれた、西ヨーロッパのあらゆる文学作品の総体を、一つの有機的秩序とみなし、詩人は、それらの秩序全体と自身の作品との関係を常に意識しながら創作すべきだとする点。第二に、優れた詩人は、人間として特異な個性を具えているのではなく、普通の感情を強い芸術的情緒に変える「触媒」として優れているのだとする点である。

これら印象的な言説からなる「伝統と個人の才能」は、彼の『批評選集』(*Selected Essays*, 1951)でも巻頭に置かれ、彼の伝統観、詩人観について論じる上で欠かせないものとなっている。初出はイギリスの文芸雑誌『エゴイスト』(*The Egoist*) 1919年9月号と12月号であるが、その掲載に至るまでの道筋を『エゴイスト』誌上に辿ってみると、エリオットによる二つの「現代詩についての考察」(以下「考察」と略。“Reflections on Contemporary Poetry”, 1917, 1919)に行き当たる。これらは、その頃に発表された他の詩人たちの詩作品を論評したものだが、やはり「伝統」や「個人」についての言及を含み、テーマや語彙の点で「伝統と個人の才能」とのつながりを示唆するものとして興味深い。特に「伝統」という言葉の扱い方が、それぞれの文章のなかで微妙に異なっていることは注目すべきであろう。「考察」(1917)についてはヒュー・ケナーが、また「考察」(1919)についてはハロルド・ブルームが、それぞれ「伝統と個人の才能」との関連で言及・引用を行なっている。しかし、この三篇を併せての十分な検討はなされていない。<sup>1</sup> エリオットの評論集にも再録されていない二つの伝統論と比較すると、「伝統と個人の才能」において主要な位置を占める「伝統」のイメージが、執筆当時は必ずしも確定していなかったことを窺い知ることができるのである。

1917年に第一詩集『ブルーフロックとその他の観察』(*Prufrock and Other Observations*)を刊行した後、エリオットは詩よりもむしろ、書評を始めとする評論で活躍しており、雑誌や新聞に数多くの文章を寄稿している。1917年から1919年にかけての主な寄稿先としては『ニュー・ステイツマン』(*New Statesman*)、『アシーニウム』(*Athenaeum*)、そして『エゴイスト』が挙げられる。これらに掲載された膨大な数のエッセイには単行本に収録されていないものも多いが、この時期の活動がエリオットの批評活動の基礎を作ったことは否定できない。グレாம்・ハフは、批評家としてのエリオットを論じるにあたり、多岐にわたる新刊文学書の書評、作家の生誕(あるいは没後)何百年といった日に因む記事など、一見何のつながりもない事柄を契機として書かれた文章が、一貫

した思考のつながりを持った批評群を形成していることを称賛している。<sup>2</sup> ならば逆に、それぞれの評論を書評としてのコンテクストに置き直してみると、この時期のエリオットが、数々の偶然の機会を通して、いかに「自分自身を定義」<sup>3</sup> していったかを知ることにも可能であろう。

『エゴイスト』誌と「伝統と個人の才能」との関わりを探るうえで注目したいもう一つの文章が、1914年7月号の巻頭に掲げられている。フランスの批評家・詩人、レミ・ド・グールモン(1858—1915)による、「伝統とその他」(“Tradition and Other Things”)である。エリオットがこれを目にしたかどうかは定かではないが、タイトルの上でもエリオットのエッセイと類似が感じられ、後述するように、内容面でも対応する点が見出されるからである。

本論文では、「伝統と個人の才能」をこれら三つの伝統論と比較しつつ読み直す。エリオットによって、近接する時期に、しかも同じ雑誌に寄稿された二つの伝統論、そしてド・グールモンによる伝統論。これらとの比較により、『エゴイスト』誌への寄稿論文という文脈からこの評論に新たな光を当てることが可能になると思われる。また、エリオットが副編集長として『エゴイスト』の編集にも携わっていたことも視野に入れる必要がある。雑誌への寄稿者としてのエリオット、そして編集者としてのエリオットが、その二重の役割を演じた『エゴイスト』誌。この雑誌において、「伝統と個人の才能」が形成される過程を追ってみたい。

### 『エゴイスト』誌とエリオット

三つの評論について論じる前に、まずそれらが掲載された『エゴイスト』という雑誌について、簡単に触れておく。<sup>4</sup> この雑誌は、1910年代から20年代にかけてイギリス、アメリカで数多く発刊されたいわゆる「リトル・マガジン」——前衛的な小雑誌の一つである。もともとは、フェミニズム雑誌であった『フリーウーマン』(*Freewoman*, 1911—1912)、およびその後継誌『ニュー・フリーウーマン』(*New Freewoman*, 1913—1914)を前身とする。『フリーウーマン』刊行当時、婦人参政権運動の盛り上がりに伴い、その問題を扱った数多くの刊行物が発行され、女性読者に支えられて部数を伸ばしていたが、『フリーウーマン』では、参政権の問題に限らず、より幅広い観点からフェミニズムに関する議論を行なおうとした。ブルジョアの参政権論者の雑誌からは拒否されるようなラディカルな論者も寄稿し、誌面と連動した講演会や討論会も盛んに行なわれた。大きな活動団体とのつながりを持たなかったため、購読者数は伸びず、1912年に廃刊するが、翌年『ニュー・フリーウーマン』として復刊。次第に、前衛文学者・芸術家の活動の場としての意味を持つようになっていた。『ニュー・フリーウーマン』にはエズラ・パウンドやイマジズムの詩人リチャード・オールディントン、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズらが寄稿者として名を連ね、中でもパウンドはこの雑誌によって、新しい詩と美学に世の注意を喚起しようとした。1913年12月にオールディントンが副編集長になり、翌1914年1月1日号をもって『エゴイスト』と改称したときには、ほぼ完全に文芸誌に変貌を遂げていた。編集長は創刊号から1914年6月15日号までを『フリーウーマン』創刊当時から引き続きドーラ・マーズデンが務め、その後最終号までをハリエット・ショウ・ウィーヴァーが務めた。副編集長は1917年5月までオールディントンで、レナード・コンプトン=リケット、H.D. (ヒルダ・ドゥーリトル) も一時加わったが、オールディントンの第一次世界大戦への出征を機に、6月号からエリオットが副編集長となっている。「伝統と個人の才能」後半が掲載された1919年12月号を最後に『エゴイスト』は廃刊している(その時点ではまだ「休刊」ということになっていたが)<sup>5</sup>、副編集長でもあったエリオットは、自らのこの名高いエッセイで雑誌の最後を飾ったことになる。

『エゴイスト』の主な寄稿者にはエリオットやオールディントン、パウンド、そしてド・グール



モンを始め、F.S. フリント、ウィングダム・ルイス、H.D.、ジョン・グールド・フレッチャーらがいる。またジェイムズ・ジョイス、ハーバード・リード、メイ・シンクレア、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ、イーディス・シットウェルなどの作家も作品を寄せていた。この顔ぶれからも窺えるように、『エゴイスト』は、当時の前衛的な作家たちの発表の場、および、彼らの作品について論じる場となっていたのである。1915年5月にはイマジズムの特集を組んでおり、同時代のフランス文学、ロシア文学の紹介も盛んに行なわれた。また、ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1916) 全編、および彼の『ユリシーズ』(*Ulysses*, 1922) の一部もここに連載されている。

エリオットによる『エゴイスト』への投稿は、1917年7月号が最初で、廃刊までの三年間に、計25編の散文を載せている。特に1918年には、発表された評論の半数が『エゴイスト』に掲載されたものであった。<sup>6</sup> 1919年には三篇しか載せていないが、そのうちの二つが、分載された「伝統と個人の才能」であり、残る一つは、「考察」(1919)である。また、同じく伝統についての言及がある1917年の「考察」は、『エゴイスト』に書き始めて間もない11月号への掲載である。これらの評論は、エリオットが『エゴイスト』と関わった時期とほぼ重なる期間に発表されているといえることができる。

### レミ・ド・グールモンの伝統論

エリオットは、最初の評論集『聖なる森』(*The Sacred Wood*, 1920) の1928年版序文で、次のように述べている。「そのころ、私はレミ・ド・グールモンの批評作品に大いに刺激され、また大いに助けられてもいた。ここに、彼の批評が私に及ぼした影響を認め、謝意を表するものである。」<sup>7</sup> ここで「そのころ」と彼の言う時期は、すなわち「伝統と個人の才能」および二つの「考察」が書かれた時期でもある。ド・グールモンについては後年の「批評家を批評する」(“To Criticize the Critic”, 1961) のなかでも、『エゴイスト』編集者時代の著作にド・グールモンへの言及が多いことや、それがパウンドの影響によるものであることを認めている。<sup>8</sup> ド・グールモンは、小説や詩のほかには評論『文体の問題』(*Le problème du style*, 1902)、『文学散歩』(*Promenades littéraires*, 1904-13) などで知られ、また『仮面の書』(*Le livre des masques*, 1896-98) などで象徴派詩人をいち早く紹介した。『エゴイスト』にも何度か寄稿している。彼はイマジズム詩人たちにとっても重要な存在であり、またパウンドは彼の著作に多くを学んでいる。<sup>9</sup> エリオット自身によるド・グールモンへの言及は、後の彼の評論にたびたび見られ、そのいずれにおいても、批評家としての彼を高く評価している。<sup>10</sup> エリオットとパウンドの交友が始まったのは1914年9月のことで、パウンドがその年創刊したばかりの『エゴイスト』誌——彼自身も『ニュー・フリーウーマン』時代から深く関わっていた——をエリオットに見せた可能性もあり、その際、同年7月号巻頭に載っているド・グールモンの文章が、エリオットの眼に触れたとも考えられる。また、後に彼が編集者となってから、バックナンバーを読んだ可能性もある。

先に引用した『聖なる森』1928年度版序文を始め、ド・グールモンの名を出している箇所では、エリオットは常に、彼に対し肯定的であり、敬意を払っている。彼が引用しているのはド・グールモンの『文体の問題』で、「伝統とその他」への直接の言及はない。従って、エリオットがこれを読んでいたのかを、ここで実証することはできない。しかし、「伝統と個人の才能」でド・グールモンの名に一切言及せずに行なわれるのは、結果として「伝統とその他」のド・グールモン（あるいはド・グールモンの言説）に対する反論である。1928年版序文のなかの「大いに刺激され、また大いに助けられてもいた」という言葉には、単に肯定、共感、賞賛という評価ばかりでなく、反発、否定、乗り越えという、いわば逆の力を引き出したという意味合いも含まれているのではないかと

ここではまず、「伝統とその他」の概要と、その特徴を挙げておこう。

ド・グールモンの「伝統とその他」はオールディントンによる英訳で、39の短いパラグラフからなる。「我々はあまり伝統を誇るべきではない」という言葉で始まり、伝統を否定的に捉えている。踏みなれた道よりも「新しい道を歩いてみる方がよい」のであり、伝統とは「作家の独創性に反対する強大な力」である、と言う。<sup>11</sup> 伝統はここでは圧倒的な力をもって新しい試みを阻むものとみなされ、「くびき」(yoke) や「重荷」(burden)などの言葉で形容されている。しかし一方では、彼は伝統には「継続的な伝統」と「復活する伝統」の二種類があって、それらは混同されてはならないとも述べている。すぐ前の時代のもの、すなわち「継続的な伝統」に縛られるよりも、自らが直接知らない遠い時代の伝統を“renew”し、“rediscover”するほうが豊かなものを生むことができるとして、遠い過去のことも知らなくては「よい文学伝統」は持てない、とも述べている。<sup>12</sup> この点に関しては、エリオットの1920年の評論「フィリップ・マシンジャー」(“Philip Massinger”)に類似の表現が見られる。「未熟な詩人は模倣する。成熟した詩人は盗む」という有名なくだりの少し後に、エリオットは次のように述べる。「優れた詩人は、たいてい遠い過去の作家か、違う言語の作家か、あるいは違うことに関心を持つ作家から借用する。」<sup>13</sup> これはエリオット自身の関心の在り処、および彼の詩作にあてはまることであるが、ド・グールモンの前掲の文と共通する論法である。

とはいえ、ド・グールモン言う二種類の「伝統」には、ごくオーソドックスなイメージしか与えられていない。それは作家の冒険を阻むくびき、踏み慣らされた古い道である。そして、「よい文学伝統」は、あくまでも、再発見された「古い道」なのである。伝統への盲従を否定する一方で、過去の優れた作品を再発見することを奨励しているが、伝統はあくまで過去に属するものとみなされる。そして、終わり近くでは再び伝統を脅威と感じる言説が続く。「フランスの伝統はあまりに膨大で、あまりに相反しているので、それ自体があらゆる好みに対応できる。」「この文学伝統の重荷は何と重いことか!」「それは混沌だ、森の中の沼地だ。もはや空も見えない。切り倒せ、切り倒せ!／彼ら〔過去の作家たち〕は私のあらゆる語句、あらゆる概念を先取りしてしまっている。彼らは私を窒息させる。」こうして、文章は自由への渴望で終わっている——「我々には多くの模範はいらない。より必要なのは、お前〔伝統〕が我々から隠している自由な生命の光だ」。<sup>14</sup> 過去の作家に全てを言い尽くされてしまったという絶望感。圧倒的に巨大な文学伝統に対する、いわば「遅れてきた者」としての無力感。「模範」の拒否と「自由な生命の光」への憧れ。これらの言説は、後述するように「伝統と個人の才能」において、隠れた叩き台として機能することになる。

### 「現代詩についての考察」(1917)

このエッセイは、ハリエット・モンローとアリス・コービン・ヘンダーソン編の現代詩アンソロジー、『ニュー・ポエトリー』(*The New Poetry*)の書評である。エリオットによれば、この詩集は、詩人の「心からの叫び」を詩にした新しい試みであるということが謳い文句であった。だがエリオットは、「心からの叫び」が詩のレトリックと相反すると主張する編者の序文に対して疑問を呈する。「『ニュー・ポエトリー』でレトリックを避けることができている詩人は・・・程度の差はあるにせよ、知性を働かせることによって避けているのである。そして知性の重要な機能は、我々がその置かれた状況のなかで、正確に何を、どのくらい感じているか識別することなのである。」<sup>15</sup> ここには、「伝統と個人の才能」を始めとする評論のなかで展開される主張、すなわち、詩の技法が知性によって制御されるべきとする主張が表れている。しかし、彼が問題視しているのは、レトリック無視の「心の叫び」をもって因習を打破する、という図式なのである。

前段として、エリオットは「伝統」という言葉が一般にどう使われているか、という点から語り

始める——人はみな、新しい概念をそう多く頭に入れることはできないので、「自分で研究する時間がなかったり、そうする気の起こらなかったりする概念、信念、感じ方、振舞い方に出会うと、我々はそれを“second-hand”と思ったり、伝統と呼んだりするのである。」<sup>16</sup>ここにエリオットはわざわざ注釈を付け、ローマ教皇が伝統重視の考えを非難した回勅や、ヴァティカン公会議の1870年法規を引用して、ローマ教皇庁でさえ伝統への固執には批判的になることがある、と、真面目とも冗談ともつかぬ論証をしている。エリオットが皮肉をこめて描き出すのは、単に自分が受け入れることのできない概念や信念、振る舞いをすべて「伝統」という言葉で片付けてしまう現状であり、ここでは伝統は、過去のものというよりもむしろ、“second-hand”と同格に使われるほど軽い存在になってしまっている。

この評論の数ヶ月前、エリオットが『ニュー・ステイツマン』に発表した「自由詩について」(“Reflections on ‘Vers Libre’”, 1917)には、ほぼこれと同様の論旨がみられる。理想社会では「よい古さ」から「よい新しさ」が育ち、そこには「生きている伝統」がある、と言う。<sup>17</sup>これは、先にみたド・グールモンの伝統論と、基本的には同様の論理展開である。しかし現実の社会では伝統は盲信と墮していて、だから新しい刺激を極端に強く与えねばならなくなってしまうのだ、とエリオットは述べる。全体としては「自由詩」の行き過ぎを批判しており、詩には必ず何らかの形式が必要なのであり、「自由」な詩などというものはありえないのだ、と言う。「自由詩」は、オールディントンやフリントらイマジストたちによって新しい詩法の重要な柱とされていた。彼らが主要な寄稿者であった『エゴイスト』誌においても、編集者のエリオットが「自由詩」批判をしていたということは、いささか奇異に感じられる。またエリオット自身、初期の詩はラフォルグらの自由詩に倣って書いている。しかしエリオットも、またイマジズムの初期の推進者であったパウンドも、詩の「形」を考慮しない全くの自由詩が現れることには、危惧を感じるようになっていた。<sup>18</sup>「自由詩について」はそうした危惧によるアンチテーゼと考えられるが、「考察」(1917)では、「伝統」についての一般の見解が更に否定的に捉えられており、同時に、「伝統」への表面的な反発への批判がより鮮明に打ち出されている。こうして、伝統が盲信と化している現状と、極端な「自由詩」運動が、関連づけられ、ともに批判されている。

### 「現代詩についての考察」(1919)

「考察」(1917)と比べると、この評論では、むしろ詩人が「伝統」から受ける恩恵のほうが強調されている。その恩恵は、他者との交わりによって成長する若者の比喻によって表わされている。過去の特定の詩人に強い親近感を覚え、その詩人に傾倒することは、ちょうど深い友情が人に影響を与えるのと同じように、その人の作家としての人格に影響を与えるというのである。特定の詩人への強い親しみによって確固とした自信が生まれ、単に偉大な作家であるということだけで他の詩人を崇拝したりすることがなくなる。また、この友情によって、その詩人が出入りしている社会に案内される。「その社会の始まりと終わりを知ることができ、自分の世界が広がる。模倣するのでなく、変わるのである・・・借りるのではなく生き返らされるのであり、そして我々は伝統の担い手となる。」<sup>19</sup>このように、「伝統」は、特定の詩人への傾倒を媒介として、その詩人を取り巻く世界に触れることによって得られるものとされている。そして過去の作家たちは、ド・グールモンが描いたような、自分の言葉をすべて先取りしてしまう恐ろしい集団ではなく、親切的友人として現われるのである。エリオットは続けて、「現代詩にはこの種の経験が著しく欠けていて、伝統が不足しているように感じられる」と述べている。伝統は創作の幅を広げるものとして肯定され、現代詩にはそれが不足していて、単に新奇さを追い求めるだけだと指摘するのである。

1917年の「考察」では「伝統」が抽象概念でしか登場しなかったのに比べ、ここでは、伝統のイメージが具体的な比喻で表わされている。しかし、共感を覚える過去の詩人に導かれてその詩人の属する社会に入るといふこの比喻では、あたかも、そうした社会＝伝統がいくつもあり、そのどれかを恣意的に選ぶかのような印象を与える。また、そこに描かれるのは過去から一方的に与えられる影響であって、現在から過去への働きかけについては全く言及されていない。

しかし、「伝統」がレトリックと結びつけて議論されているという点では、1917年の「考察」とも、また「伝統と個人の才能」とも共通している。1919年の「考察」で彼が「現代詩」として取り上げているのは、ハーバート・リードの戦争詩、トリスタン・ツァラの詩、そしてコンラッド・エイケンの長詩であるが、特に槍玉に挙げられているのがエイケンである。彼の長編詩について、その野心的な試みを評価しつつも、韻律が作品にそぐわないことと、あまりに内省的すぎることから、詩として成功していないと断じ、「アメリカで作家が成熟するのは難しい。何とも残念なことだ。エイケンがこれほど孤立していなかったら、ヨーロッパの文化と接していたら、彼はもっと先へ進めるかもしれないのに」<sup>20</sup>と嘆いている。前段の比喻を念頭に置くと、エイケンはヨーロッパ文化という社会に触れなかったために自分勝手に書いて失敗したアメリカ人として描かれていることになる。正に言いたい放題だが、自分も同じアメリカ人であり、エイケンとはハーヴァード大学時代からの友人であるからこそ、このような歯に衣着せぬ書き方ができたのであろう。また掲載されるのが、読者の限定された雑誌であったことも影響していたかもしれない。<sup>21</sup>

この評論は「ここで再び伝統の問題に立ち戻るべきだ。そして、詩の発達と成熟において、何が変わり、何が変わらず残るかを考えるべきだ」<sup>22</sup>という言葉で終わっている。結論は保留された形で、先に持ち越されている。そして、2ヵ月後の「伝統と個人の才能」で再び取り上げられることになる。

### 「伝統と個人の才能」

この評論では、「現代詩についての考察」(1917)同様、「伝統」という言葉がいかに軽んじられているか、ということから話を始めている。そして、「考察」(1917)で提起された問題——過去の作家に学ぶことの重要性について敷衍している。ここで強調されていることは、詩人の個性が決して伝統と対立する、あるいは伝統と無関係に存在しているものではないということである。

「考察」(1919)では、エリオットは伝統との出会いを、人生における人との出会いがその人の内面を一変させるように、作家としての内面を一変させると述べた。しかし、「伝統と個人の才能」においては、そうした実人生とのアナロジーは排され、それに該当する事柄は、詩人の成熟過程の一段階として取り込まれている。「彼〔詩人〕は過去を一つの塊、何もかも一緒くたになった丸薬とみなすことはできないし、一人か二人の個人的に崇拜する詩人のみで自分を形成するわけにも、自分が好きな一つの時代だけに頼って自分を作り上げるわけにもいかないのである。第一の見方は容認しがたいものである。第二の方法は青年期には大切な経験であり、第三の方法は、それにつけ加えるものとして、楽しい、非常に望ましいことである。」<sup>23</sup> 特定の詩人への傾倒、および、特定の時代への傾倒は、詩人の成長における一過程として肯定こそされるものの、それだけではもはや充分とはみなされない。25歳を過ぎても詩人でありつづけたいならば、より普遍的な「歴史的意識」を持つことが必要だとするのである。それは特定の詩人や、それを取り巻く特定の作家群ではなく、ホメロス以来現在に至る、ヨーロッパ文学の総体という、より包括的、かつ抽象的なイメージで表わされている。ブルームは、「伝統と個人の才能」におけるエリオットは公的 (official) なエリオットであり、決して「詩人」のエリオットではないと述べた。彼によれば、むしろその直前に発表された

「考察」(1919)における成長する青年のイメージに、彼の詩人としての本音が表れていて、それは「伝統と個人の才能」の「公式」見解とは矛盾するという。エリオットは「伝統と個人の才能」では本音を隠して読者を「欺いて」いたのであり、彼自身がのちに前者を却下したのは、それがあまりに個人的な面を強調していたからであろうとブルームは推測している。<sup>24</sup>しかし、「伝統と個人の才能」のエリオットを公的、「考察」(1919)のエリオットを私的と明確に区別することは果たしてできるのだろうか。むしろ前者では、一人の詩人としての実感を、より一般的な詩人論のなかに組み入れたといえるのではないか。また、巨大な文学伝統といかに対峙するかという問題に、詩人としてのエリオットの声が全く入っていないと言い切ることもできないであろう。

「伝統と個人の才能」では、これまで見てきた二つの伝統論と比べると、この巨大な「伝統」に対し、個人に置かれるウェイトはかなり縮小されているかのように見える――

詩人は、やがてヨーロッパの精神、自国の精神が自分自身の私的精神よりもずっと重要であるということを知るのだが、このヨーロッパ精神は変化し、しかもその途上で、シェイクスピアであれ、ホメロスであれ、旧石器時代の絵描きたちが岩に描いた絵であれ、それが時代遅れだからといって何一つ捨て去ることはない、ということを、詩人は意識していなければならない。この発展、おそらく洗練と言うべきかもしれないし、複雑化と言った方がよいかもしれないが、これは芸術家の眼から見れば、何ら進歩などではないのである。<sup>25</sup> (下線筆者)

こうして個人に対する伝統の重要性が強調され、エッセイの前半は「結果として起こることは、そのときあるがままの自分自身を、絶えず、より価値のあるものにゆだねていくことである。芸術家の進歩とは、絶えざる自己犠牲、絶えざる個性の滅却なのだ。」<sup>26</sup>との言葉で終わっている。ここで「伝統」は再び、ド・グールモンの描いたような、個を圧倒する巨大な力に戻ったかに見えるかもしれない。

しかしながら、彼は一方で、現在が過去におよぼす影響力についても指摘している。「現存するモニュメントは互いの間で理想的な秩序を形成していて、新しい(真に新しい)芸術作品が加わると、その秩序が改められる。・・・この秩序、ヨーロッパ文学あるいはイギリス文学の総体という概念を受け入れる人なら誰であれ、現在が過去によって支配されるのと同様、過去も現在によって変えられるのだと言っても、それをあべこべだとは思わないだろう。」<sup>27</sup> このように、現在が過去に対して逆方向に作用することは、この評論で初めて明確に打ち出されたもので、その他二つの伝統論には見られない。たとえば「考察」(1919)では、詩人と伝統との関係が、若者とその若者が参加する社交仲間という比喻で表わされていたが、若者が周囲に影響を与え、変化をおよぼす可能性については指摘されていないのである。「伝統と個人の才能」において初めて、個人は受身ではなくなり、伝統に対して対等な力をもつものとなっている。

さらに、過去を一つの秩序とみなすこと、その秩序と自己の作品とを関連付けてとらえること自体も、現在という視点があってこそ可能となるものである。このように、「伝統と個人の才能」において主張される過去と現在の相互作用は、ド・グールモンによって提示された過去の脅威の克服であったと言えるだろう。ド・グールモンにおいて、過去の総体は得体の知れぬ混沌であり、詩人の自由な創作を阻む存在であった。これに対し、「伝統と個人の才能」において、過去の総体は、現在という視点によってつくりだされる秩序であり、この視点があって初めて成立する存在である。そうした視点を可能にするものこそ、過去の現在性を認識する「歴史的感覚」であった。

この「歴史的感覚」という用語は、それまでの彼の伝統論には出てこないものだが、1919年7月にメアリ・ハッチソン宛てに書かれた手紙のなかで、この言葉が使われている。この手紙で彼は、

「文明」(civilization)と「文化」(culture)の違いについて論じ、その双方が必要であると述べている。<sup>28</sup> 彼の説明によると、「文明」は「非個人的 (impersonal)」で「伝統的」なものであり、それは人々を無意識のうちに形作る。これに対し「文化」は、特定のものへの個人的な興味や好奇心であり、それは主として「歴史的感覚」であると言う。そしてエリオットはこの感覚を定義して、「自分の個人的好みを殺すことなく、自分の感情と客観的な批評とを区別するバランス感覚」であるとしている。流行や他人の批評にとらわれることなく、自分の「個人的好み (personal taste)」を確立するために必要なものとして、「歴史的感覚」が挙げられているのである。つまりここでは、非個人的な「伝統」から独立した「個人的好み」を擁護するためのバランス感覚が、「歴史的感覚」なのである。

ハッチンソン宛ての手紙では、このように、「歴史的感覚」は個人的な好みと密接に結びつくものであった。しかし「伝統と個人の才能」では、個人的なものを非個人的なものに変えていくために「歴史的感覚」が必要とされている。伝統と自己との関係を絶えず問い直すのに必要なものとして、「歴史的感覚」はとらえられている。そして、そうした感覚をもつことで、個人は過去に対して働きかけることができる。このことをふまえると、先に引用した「個性の滅却」は、個の超越と言い換えられよう。個人の個性は、伝統との関係のなかで、単に個人的なものではなく、個を超えた普遍的な「芸術」に変化する。個人が歴史感覚によって個を超越するとき、伝統と個性は相対立するものではなくなるのだ。

「伝統と個人の才能」後半部分では、この個性の超越について、白金の線が触媒となって起きる気体の化合を比喩に用いている。すなわち、白金を用いて二種類の気体を化合させる際、触媒である白金は何の変化も蒙らない。詩人の精神も、この白金同様、一つあるいは複数の感情や情緒を変化・結合させて芸術作品へと作り上げる触媒なのだ、と言う。<sup>29</sup> この比喩は、詩作というプロセスをできるだけ無機的に、敢えて人間味を感じさせないものとして表現するためのものだったのだと考えられるが、芸術表現には個人の経験や感情とは分離した知的な作業が必要なのだとする主張、詩にはそれぞれ適切な表現の形が必要なのだという主張は、二つの「考察」、および「自由詩について」でも繰り返し述べられていることである。「詩人の仕事とは、新奇な情緒を見つけることなく、ありふれた情緒を使いながらも、それを詩にする過程で、現実には存在しない感覚を表現することなのだ」。<sup>30</sup> 詩人はあくまで触媒の役に徹し、新奇な感情を追い求めるのではなく、非個人的な芸術的情緒を作り出さねばならない、と主張されている。

作家の個性に関して、ここで再びド・グールモンとの関連性に立ち戻ってみたい。過去の作家からの引用についてエリオットが「フィリップ・マシンジャー」で述べていることが、ド・グールモンの「伝統とその他」での言説と類似していることは既に述べたが、「フィリップ・マシンジャー」では、エリオットはド・グールモンに直接言及している。彼はド・グールモンの「文体の問題」の、彼が「素晴らしい」と評する数ページからその一部を引用している。そこには次のような文章が見られる——「人間にふさわしい活動の目的は、その個性を払拭すること、教育が沈殿させた汚れのすべてを洗い清めること、我々の青春期の感歎が残した痕跡のすべてを洗い清めることである」。<sup>31</sup> ここで言われている「個性」の「払拭」は、必ずしもエリオットの言う「個性の滅却」と一致しないが、芸術家の成長をその個性の払拭として捉える点においては、エリオットはド・グールモンを踏襲していると言える。しかし、伝統との関係においては、エリオットは彼の説を乗り越えようとしている。個性の払拭が伝統との対立ではなく、和解と結びついているのだ。そうした「個性滅却」のために、詩人は「現在の中だけでなく、過去の現在する瞬間に生きていなくてはならない」<sup>32</sup> と結論づけられている。前半部分で提示された「過去の同時性」への意識すなわち「歴史的感覚」が、私的な感情に支配されない非個人的な詩作を可能ならしめるものとして、再び提示されているので

ある。

ではそうした「歴史的感覚」がどのようにして私的感情を克服するのか。これまで検討してきた「考察」(1917、1919)と併せて考えてみると、過去の多様な作品を現在という視点から客観的に眺めることで、普遍的な表現方法を獲得できると、一応は解釈するのが自然だろう。しかし、その過程について、「伝統と個人の才能」のなかでは、それ以上具体的な議論はなされておらず、むしろ強調されているのは、現在という視点の持つ強さのほうなのである。

### 「伝統」のイメージ——変化と共通性

これまで比較してきたエリオットの三つの伝統論において、「伝統」のイメージは絶えず揺れ動いている。「考察」(1917)では伝統に対する安易な反発を皮肉るにとどまっていたが、「考察」(1919)では、若者に広い世界を見せて成長させる社会のイメージを用い、「伝統と個人の才能」においては、ホメロスを始めとする過去の作品の有機的総体という（それ自体は無機的な）概念を使っている。『エゴイスト』への掲載順に「伝統」のイメージを辿ると、次第に抽象性、普遍性が増している。しかしこれらにおいて一貫しているのは、伝統と創造性が決して相反するものではないとする点である。

エリオットにおいて、伝統は常に、現在の作家に創造の糧を与える存在である。そして、「伝統と個人の才能」においては、ド・グールモン的な「伝統」と「個人」を、一部は踏襲し、一部は超えることによって、過去に対し能動的に働きかける「現在」という視点を措定した。過去を同時的存在として意識し、過去と現在をひとつの秩序として捉える視点である。ド・グールモンは新しい創造力を得るために、伝統の暗い森を振り払い、その向こうに「自由な生命の光」を見ようとした。これに対しエリオットが見出したのは、現在という視点から逆に過去を照射する光であった。これによって、「伝統」対「個人」という、文学の新しさを示す際の前提とされていた二項対立の図式を無効としたのである。ド・グールモンの「伝統とその他」から提示された課題に答えるかのように、「伝統と個人の才能」という類似したタイトルがつけられたことも暗示的である。ド・グールモンが表現したような過去への脅威を克服し、後から生れた者も過去数千年の伝統と対等の力を持ちうるということ、のみならず、過去の作家たちと共同でひとつの新しい伝統を作り出していくことができるのだという期待が、そこには込められている。

伝統対個人という二項対立の批判、およびその二項対立を超える「新しさ」の提案。その裏にはおそらく、伝統を前に、どうにかして作家としての自らの存在意義を見出そうとするあがきもあったことだろう。詩人として、エリオットもまた、ド・グールモンと同じような脅威を感じていたと思われる。それでは、書評家・編集者としてのエリオットと、彼の伝統論とはどう関わるだろうか。

「伝統と個人の才能」執筆に至るまで、彼は書評を通じて様々な書物を論じる一方、『エゴイスト』誌編集者として他者の作品（無名の作者からの投稿も含め）に多く触れていた。古今の数多くの作品を書評することを通じて、それぞれの作家固有の文体や韻律、表現される情緒などから、表現の可能性の多様さを身をもって実感したのではないか。これによって、過去の多様な作品に触れることが普遍性を持つ表現の獲得、作家としての客観的な自意識の形成に欠かせないものであるという意識が、確固たるものになっていったのであろう。また、編集者としての彼は、記事の選択や作家への原稿依頼などの編集作業を通じ、優れた作品とは何かという価値判断を常に迫られていたことになる。「伝統と個人の才能」が、詩人へのアドバイスという体裁をとっていることも示唆的である。エリオットは1917年9月、メアリ・ハッチンソン自作の物語を読んだ感想を彼女に書き送っている。



私が唯一欠点だと思うのは・・・あなたがずっと感情の内側にばかりいて、そこから外に出ないことです。私は作家というものを、完全に冷静で超然としていて、他人や自分の感情を、まるで超越者たる神のように眺めるものとして考えるのが好きです。あるいは、非常に深い水の底に潜って、そこから見たこともない深海の生き物をつかんで戻ってくる人のようなものと考えたいのです。しかし、この種の超然たる態度は非常に稀であり、ばかげた超然というものがまかり通っているので、私のそれは特殊な好みすぎません。<sup>33</sup>

ここでも、感情を客観的に眺められるということが作家の条件として挙げられていて、エリオットの三つの伝統論における主張がここでも繰り返されている。そして、自分の考えが一般と異なっていることを自覚する言葉も含まれている。ここで彼が理想とする冷静な作家像は、必ずしも伝統との関連を想起させない。評論のなかでは常に「伝統」とセットで論じられてきた「個性」の問題であるが、「伝統」の問題を離れたところでも常に意識されていたようである。そしてここではハッチンソン個人に向けて書かれているアドバイスが、より公共性を持つ形を成しているのが「伝統と個人の才能」である。「新しい」芸術を標榜する人々のなかにあって、執筆し且つ編集をしていたエリオットは、「考察」(1917)で彼が批判した風潮、伝統を敵とみなして新奇さを追い求める風潮を直に感じ、芸術における真の「新しさ」とは何か、絶えず問われる立場にあったのではないか。『エゴイスト』は、前にも述べたように、多分にイマジズム詩人たちの雑誌でもあった。詩法の革新を第一に掲げていた彼らのなかにあり、編集者・書評家として多数の作品を読み、「評価」しなければならなかったエリオットにとって、「過去の作品の有機的総体」は一つの信頼するに足る基準だったに違いない。

そして、編集者として、多様な作品を一つの雑誌に編集するということは、それ自体、異なるものを一つの有機的集合体に作り上げることである。『エゴイスト』最後の二号にふさわしく、「伝統と個人の才能」というタイトルには、この雑誌の副題である「個人主義(者)の雑誌」(“an individualist review”、イタリック筆者)の反響も見出せるのである。

## おわりに

下書きは原稿の完成と同時に忘れ去られる。「考察」二篇も、「伝統と個人の才能」に対して、似たような関係にあったのかもしれない。しかし、これら三つの伝統論が『エゴイスト』という軸の上に並べて比較されるとき、それらをつなぐ隠れたコンテクストが浮かび上がる。それは、伝統の重視というよりもむしろ、現在の視点が伝統に対してなしうる可能性を問うものであった。また、そのことは、レミ・ド・グールモンの伝統論に表れたような、過去の脅威という伝統観への挑戦、そして文学の真の新しさに対する問題意識に根ざしたものであった。「伝統と個人の才能」は、エリオットの編集者および書評家としての営為が、『エゴイスト』という雑誌を通じて、変遷を重ねながら、一つの批評的表現を得た結果なのである。

本論文は、群馬県立女子大学・平成13年度特定研究費による研究の一部である。

なお *The Egoist* については、Kraus Reprint Corporation による復刻版 (New York, 1967) を使用した。閲覧させていただいた上智大学図書館に感謝申し上げます。

- 1 Hugh Kenner, *The Invisible Poet: T.S. Eliot* (London: Methuen, 1979), 100. Harold Bloom, *The Breaking of the Vessels* (Chicago: The U of Chicago Press, 1982), 18-21.
- 2 Graham Hough, “The Poet as Critic,” *The Literary Criticism of T.S. Eliot*, ed. David Newton-



- De Molina (London: The Athlone Press, U of London, 1977), 48.
- 3 Hough, 47.
- 4 Mark S. Morrison, *The Public Face of Modernism : Little magazines, Audiences, and Reception 1905-1920* (Madison: The U of Wisconsin P, 2001), 91—95 : Frederick Hoffman et al, *The Little Magazine : A History and a Bibliography* (Princeton : Princeton UP, 1947), 22, 244.
- 5 Letter to John Quinn (9 July, 1919) および Letter to Edgar Jepson (22 September, 1919). Valerie Eliot ed., *The Letters of T.S. Eliot*, vol. 1 (London : Faber and Faber, 1988), 315, 332.
- 6 Donald Gallup, *T.S. Eliot : A Bibliography* (London : Faber and Faber, 1969).
- 7 T.S.Eliot, *The Sacred Wood* (London : Faber and Faber, 1997), x.
- 8 Eliot, “To Criticize the Critic,” *To Criticize the Critic and Other Writings* (London : Faber and Faber, 1988), 17.
- 9 Stanley K. Coffman, Jr., *Imagism : A Chapter for the History of Modern Poetry* (New York: Octagon Books, 1977).
- 10 Eliot, *Selected Essays* (London: Faber and Faber, 1991), 32, 137, 217. また「完全な批評家」(1920)においては、各部にド・グールモンからの引用がエピグラフとして用いられ、本文では「現代の批評家のなかで、アリストテレスのような総合的知性を最も多く具えている」人物として彼を評価している。*The Sacred Wood* (London : Faber and Faber, 1997), 11. その他、エリオットのエッセイにおけるド・グールモンの反響については次を参照。Peter Ackroyd, *T.S. Eliot* (London: Sphere Books, 1989), 55—57. 山田祥一「Personality について——T.S. Eliot と Remy de Gourmont——」『英文学研究』vol.47, no.1 (1970), 41—52.
- 11 Remy de Gourmont, “Tradition and Other Things,” *The Egoist*, vol.1, no.14 (July 15, 1914), 261.
- 12 De Gourmont, 261.
- 13 *Selected Essays*, 206.
- 14 De Gourmont, 262.
- 15 Eliot, “Reflections on Contemporary Poetry,” *The Egoist*, vol.4, no.10 (November 1917), 151.
- 16 “Reflections on Contemporary Poetry” (1917), 151.
- 17 Eliot, “Reflections on ‘Vers Libre,’” *To Criticize the Critic and Other Writings*, 184.
- 18 Coffman, Jr., 96.
- 19 Eliot, “Reflections on Contemporary Poetry,” vol.6, no.3 (July 1919), 391.
- 20 “Reflections on Contemporary Poetry” (1919), 40.
- 21 『エゴイスト』の読者層はこの頃、かなり限定していた。Morrison, 104.
- 22 “Reflections on Contemporary Poetry” (1919), 40.
- 23 *Selected Essays*, 16.
- 24 Bloom, 18-21.
- 25 *Selected Essays*, 16.
- 26 *Selected Essays*, 17.
- 27 *Selected Essays*, 15.
- 28 Valerie Eliot, 316—318.
- 29 *Selected Essays*, 17—19.
- 30 *Selected Essays*, 21.
- 31 *Selected Essays*, 217. なおド・グールモンの引用は村岡勇訳を使用。『エリオット全集』第4巻（平井正穂他訳、中央公論社、1976）、88.
- 32 *Selected Essays*, 22.
- 33 Valerie Eliot, 197.